

子どもの名前どうする？



What's in a name?

チニヒョウ 蔡熙鏡 東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員

わたしがまだ学部生だったとき、とある講義で先生が「靴紐くつじゆの先つちよの固い部分の名前ってなんだろう」とおっしゃったことがある。そんなものに、そもそも名前があることすら、知らなかった。あとになって調べてみたところ、ちゃんと名前があった。あの「靴紐の固い部分」の名前はアグレットというらしい。人は名付けたがり屋であり、ありとあらゆるものに名前がついている。今になって考えてみると、当時は何とも思わなかったあのエピソードが、そのことに気づくきっかけとなっていたのかも知れない。

我々は、きっかけは何であれ、一生に一回ぐらいいは名付けという行為をおこなう。名前をつける際には、名付けられるものの性質や外見などの特徴を取り入れたり、願望などを込めたりして名付けることが多いようだ。一方で、名付け行為には、命名者のセンスや性格が反映される側面もある。例えば、犬に「トド」という名前をつけたら、面白い(または変わった)人だなあと思われるかもしれない。もしも「iPS細胞」という名前ではなく、「山中幹細胞」という名前だったとしたら、命名者の秘めた遊び心を我々が垣間かま見ることはできなかつたであろう。

ところで、この名付けというのが思わぬ議論を引き起こすこともある。隣の国である韓国で

は、九〇年代後半から「四文字の名前」をもつ人があらわれ始めており、今ではメディアでも見かけることがある。韓国は一般的に、姓一字と名前二文字の計三文字からなる人の数が圧倒的に多い。また、夫婦間は別姓を使っており、子どもは父親の姓を受け継ぐのが普通である。それに対し、「四文字の名前」をもつ人というのは、父親の姓と母親の姓の両方を一緒に使っている人のことであり、例えば「李」姓の父親と「朴」姓の母親の子どもなら、「李朴〇〇」と名乗っているのである。

このような動きは、家父長的な韓国の社会制度に対する不満や、男女平等という考え方がその動機になっているといわれている。今の韓国の法律では、婚姻届を出す際に、申請さえすれば、子どもに母親の姓を継承させることもできるように一応はなっている。そうはいつても、実際には父親の姓を引き継がせているのがほとんどであり、父母の両姓を一緒に名乗る「四文字の名前」に対しても、「反対意見の方がまだ多い」。

近い将来、結婚前に「子どもの名前どうする？」と韓国人カップルが相談し合う時代が来るかもしれない。もし、そのような時代が来たとして、この名付け問題がこじれて別れたりするカップルがあらわれないことを願いたい。

